竹中氏の略系図

一　初めに

竹中氏は、美濃国大野郡大御堂を本拠地としていたが、竹中半兵衛の父・重元の代に、同国不破郡岩手を攻略し、ここに本拠地を移した。半兵衛は、一時、斎藤龍興の稲葉山城を攻略したが、その後、織田信長に仕え、羽柴秀吉のもとで姉川の戦い・小谷城攻め・長篠の戦いなどに参戦し、三六歳の若さで、播磨国三木城攻めの陣中で亡くなった。その子、重門は父の跡を継いで秀吉に仕えたが、関ヶ原の戦いでは、当初は西軍側として美濃の諸将とともに犬山城に籠城したものの、その後、井伊直政の仲介で東軍側へ転じて武功を挙げ、幕末まで続く交代寄合旗本として竹中家の基礎を築いた。

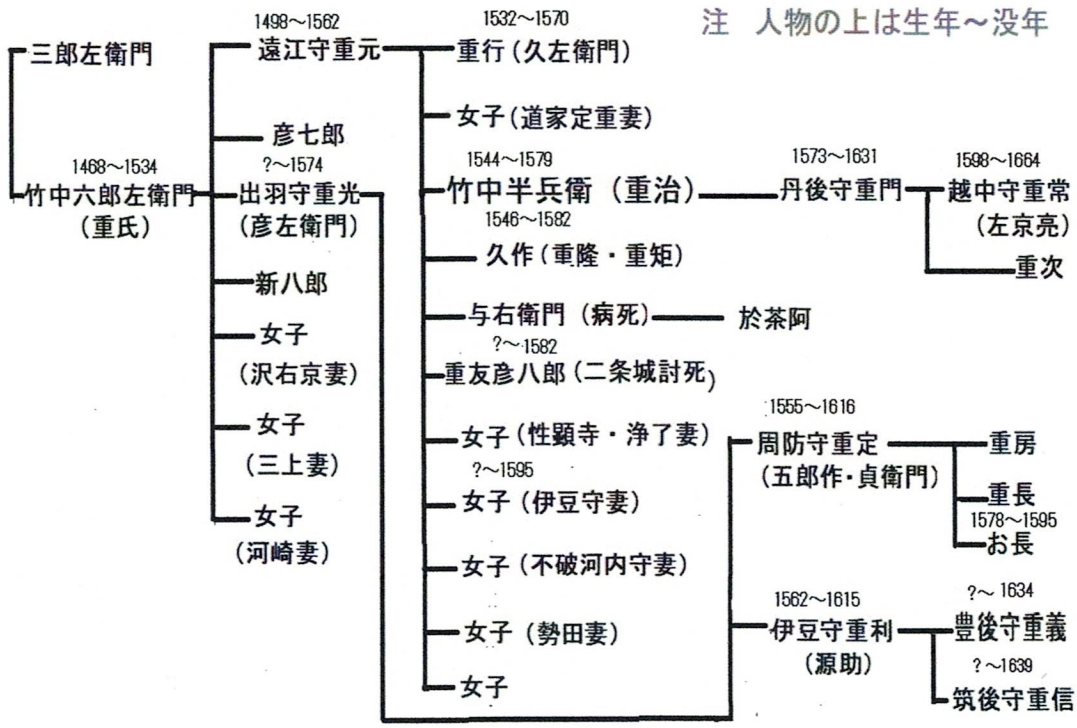
ここで、参考文献③を底本に諸系図を校合して竹中氏の略系図を作成し、人物の生没年等から考察する。

二　系譜の人物

（一）竹中六郎左衛門重氏（一四六八～一五三四）六六歳没。他に源助・重道・重久・元重とある。岩手弾正重久から初めて竹中氏を名乗る。室は近江国多賀小次郎女。兄に三郎左衛門がいる。

竹中氏略系図（岩手明泉寺古文書を底本に諸系図を校合）

注　人物の上は生年～没年



（二）**遠江守重元**（一四九八～一五六二）六四歳没。他に彦三郎重基・道治とある。室は妙海大姉。室は妙海大姉。斎藤道三家臣、永禄元年（一五五八）岩手弾正忠信冬（長誠）を追放し岩手城を奪う。同二年菩提山に砦を築く。福田・長松・栗原・岩手・府中・梅谷・荒尾・松尾の付近一帯の地を併せ領して六千貫文の領主となる。同五年二月七日死。永禄五年二月七日死。禅幢寺に葬られる。

（三）**出羽守重光（彦左衛門）**（不詳～一五七四）
他に一時期、栗原加賀守重光と称して栗原山に住むことあり。禅幢寺に葬られる。

（四）**重行（久左衛門）**（一五三二～一五七〇）三八歳没。重元の子。戦いに大傷を負う。（文献⑤から）

（五）**竹中半兵衛（重治）**（一五四四～一五七九）三六歳没。他に重虎。永禄七年（一五六四）七月二九日付の竹中半兵衛尉重虎の禁制（岐阜市の宝林坊宛）とある。妻は得月院（安藤守就の娘）。

天文十三年（一五四四）重元の子として美濃国大御堂城（揖斐郡大野町）で誕生。

永禄元年（一五五八）重元、岩手城・岩手弾正を攻略し、半兵衛も岩手に移る。

永禄七年（一五六四）二月、従者十六名とともに美濃国稲葉城を攻略。八月、元の城主・斎藤龍興に返還。近江国小谷城主浅井長政の食客となる。

永禄八年（一五六五）岩手に帰り、栗原山に閑居。秀吉に請われて信長に仕え、秀吉の参謀となる。

元亀元年（一五七〇）朝倉義景の手筒山城・金ヶ崎城を攻撃。松尾山長亨軒城の樋口三郎左衛門の調略に成功。姉川の戦い。近江国横山城を守る。

天正元年（一五七三）小谷城攻め。お市の方母子を救出。嫡男・重門誕生。

天正三年（一五七五）長篠の戦いで、半兵衛は、武田勝頼の陽動作戦を見破り、武田軍に勝利。

天正五年（一五七七）九月、秀吉の命により播磨国に向かう。小寺（黒田）官兵衛の子松寿丸を人質として長浜へ帰参。十一月、官兵衛と共に播磨国福原城を攻める。

天正六年（一五七八年）十月、荒木村重謀反。説得に出かけた官兵衛が村重に捕らえられ、幽閉される。信長、官兵衛の子松寿丸を殺せと命じるが、半兵衛はひそかに岩手城に松寿丸を匿い、信長には殺したと報告。十一月、京都で病気療養する

天正七年（一五七九年）三月、病を押して播磨国三木城攻囲陣に戻るが、六月十三日、三木城攻略の最中、陣中にて病死する。お墓は三木市の栄運寺の裏山と平井陣所付近と岩手の禅幢寺の三ヵ所ある。

（六）**久作（重隆・重矩）**（一五四六～一五八二年）
三七歳没。他に彦作とある。兄半兵衛が隠居し、稲葉城落城

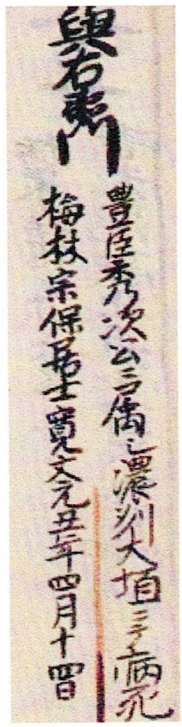
の折、信長は稲葉良通（一鉄）を使いして兄弟を招くが、半兵衛は辞退し、久作を家臣として差し出す。

永禄十一年（一五六八）の伊勢国を攻めたとき、信長の馬廻りとして参陣。

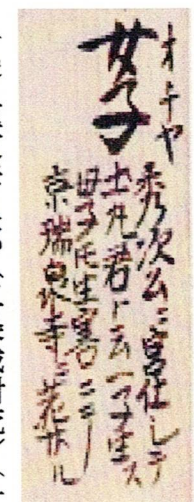
元亀元年（一五七〇）姉川の戦いで、敵の勇将遠藤喜右衛門の首級を挙げる。天正七年（一五七九）病死した半兵衛に代わり秀吉の与力として遣わされる。

天正十年（一五八二）三月、信長に従い信濃国に出軍する。同年六月、本能寺の変後同月六日に不破郡表佐村で土一揆と戦い敵の児玉文平に討たれる。禅幢寺に葬られる

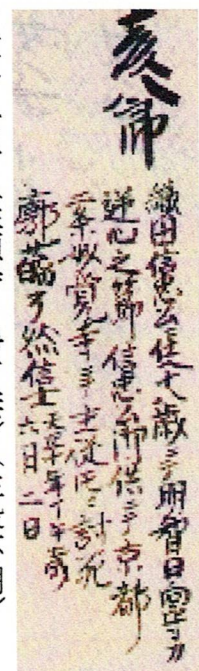
（七）**与右衛門**（病死）（不詳～寛文元丑年）他に重広・旧字の與右衛門・與衛門とある。文献④には「豊臣秀次公ニ属シ濃州大垣ニテ病死。寛文元丑年四月十四日」とある。



（八）**於茶阿**（生没不明）与右衛門の娘。文献④には「秀次公ニ宮仕シテ土丸君ト云一子生ス母子共生害ニテ京瑞泉寺ニ葬ル」とある。後述の五検証を参照。

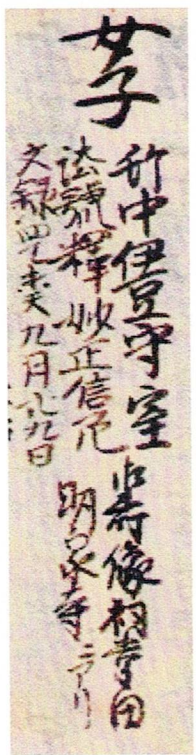


（九）**重友彦八郎**（二条城討死）（一五六四～一五八二）十八歳没。重元の子。文献④には「織田信忠公ニ仕ヘ十八歳ニテ明智日向守カ逆心之節信忠公御供ニテ京都二条妙覚寺ニテ主従屯ニ討死とある。



（十）**女子**（性顕寺・浄了妻）（生没不明）重元の長女。安八郡禾森性顕寺浄了の室。

（十一）**女子**（伊豆守妻）（不詳～一五九五）竹中伊豆守の室。文献④には「文禄四乙未九月二九日没」。竹中重利（豊後国高田城主）に嫁いだ後、豊後国から戻り、明泉寺を再興したとされる（文献①）。



（十二）**女子（不破河内守妻）**（生没不明）不破河内守光治の室。後に離別。西福殿という。

（十三）**女子（勢田妻）**勢田掃部の室

（十四）**丹後守重門**（一五七三～一六三一）病死。五九歳没。江戸屋敷にて病死。幼名は吉助・重政、半兵衛の嫡子。母は安藤守就の娘（得月院）。妻は半兵衛の親友加藤光泰の娘。

天正十二年（一五八四）の小牧・長久手の戦と天正十八年（一九九〇）の小田原征伐などに従軍する。正十六年（一五八八）年に従五位下・丹後守を賜る。翌年には美濃国不破郡に五千石を授けられる。文禄の役では備前国名護屋城に駐屯し、慶長の役では軍目付として朝鮮へ渡海する。戦後、戦功によって河内国の中に千石を加増される。

関ヶ原の戦いでは、初め西軍に属して稲葉貞通・加藤貞泰などと犬山城主の石川貞清を援助するが、井伊直政の仲介によって東軍に鞍替えする。本戦では、黒田長政軍と共に東軍の右縦隊の先鋒となり、西軍の側面を衝いて奮戦する。

九月十六日、徳川家康は近江に向けて出発するとき、重門に米千石を与えて、領地に迷惑を及ぼしたことを謝するとともに、戦場の死体を収拾して首塚を造ることや、損害を受けた社寺の修復を命じている、さらに、敵将小西行長を生け捕った功により家康から感状と行長の太刀光忠を賜る。

江戸時代に入ると、幕府旗本（交替寄合席）として忠勤に励むこととなる。慶長十九年（一六一四）の大坂の冬陣と翌年の夏の陣に二度も参陣する。庶子の重次は長政との縁により、福岡藩黒田家に重臣として仕える。

重門は駿府城に参勤のころより儒学者林羅山に師事して漢学・国学の研鑽に励み、著書「豊鑑」に秀吉の事績を書く。

墓は東京都港区の泉岳寺にある。

（十五）**越中守重常（左京亮）**（一五九八～一六六四）六七歳没。幼名は竹之助。重門の長男。妻は但馬国豊岡藩主の杉原伯耆守長房の娘。関ヶ原の戦いのとき、人質として清洲城へ送られる。

寛永十一年（一六三四）、徳川家光上洛のお供をする。寛永十七・十八年、駿河国久能山修理補奉行を勤める。

承応二年（一六五三）から万治元年（一六五八）まで六年間、炎上した禁裏の御作事奉行を勤める。これにより従五位下に叙任される。このとき、岩手館の南御殿及び岩手明泉寺の本堂を建立と伝わる。また、岩手岩崎神社に魔利支天像（摩里支菩薩、威光菩薩）を寄進する。

寛文三年（一六六三）祖母得月院の遺材を基に、現在地に禅幢寺を建立する。竹中家は江戸時代を通じて、交代寄合という家格を維持する。

（十六）**伊豆守重利（源介）**（一五六二～一六一五）五四歳没。他に重信・重義・重隆・隆重とある。重光の子。

元亀元年六月、近江国姉川の戦いの後、信長の直臣から、羽柴秀吉の与力へと転じたらしい。半兵衛重治の知行のうち

美濃国長松に三千石を分領する。半兵衛の死後、六歳の重門（幼名吉助）の後見人となる。また、秀吉の直臣にもなる。

天正十八年（一五九〇）、森忠政の家人と、美濃国恵那郡・土岐郡を検地する。同年四月、秀吉の小田原征伐のとき、馬廻り組頭を勤める。

天正廿年（一五九二）の文禄の役に従軍する。文禄三年（一五九四）、豊後国国東郡高田で一万三千石（一説に一万石）に加増されて、大名となる。

慶長二年（一五九七）二月、秀吉が、朝鮮出兵の諸将の部署を定めたとき、先手衆の軍目付の六人の内の一人に選ばれる。この頃、従五位下伊豆守に叙任される。

慶長三年（一五九八）八月、秀吉の死去により、遺物義光の刀を受領する。

慶長五年（一六〇〇）九月、関ヶ原合戦では、初め西軍に与して大坂久法寺町橋や近江国瀬田橋を警備し、丹後国田辺城攻めにも兵を派したが、その後、黒田如水に誘われて東軍に転向して所領を安堵される

慶長六年（一六〇一）、荷揚城（大分城）を与えられ、豊後国府内二万石に加増転封される。城の大改修を行い、現在の規模とし、港や城下町を整備し、現在の大分市発展の基礎を築く。大分市府内町浄安寺に葬られる。（文献①）

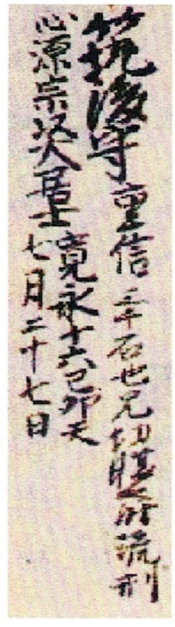
（十七）**豊後守重義**（不詳～一六三四）重利の長男。

慶長二十年（一六一五）父の跡を継いで豊後国府内藩二代藩主となる。寛永六年（一六二九）七月、江戸幕府長崎奉行に着任する。

寛永八年（一六三一）には絵踏みを初めて雲仙で行ったという記録がある。

寛永九年（一六三二）、三代将軍・徳川家光が最初の鎖国令を発したとき、重義は密貿易など職務上の不正を訴えられ、寛永十年（一六三三）二月に奉行職を罷免され、切腹を命じられる。寛永十一年（一六三四）二月、嫡子・源三郎と共に江戸浅草の海禅寺で切腹。一族は隠岐に流罪となる。

（十八）**築後守重信**（不詳～一六三九）重利の次男。徳川秀忠に仕え、三千石の寄合となる。三年（一六二六）十一月から翌年十一月まで豊後国府内藩目付役の一人として就任している。寛永十一年（一六三四）二月、兄重義に連座し、佐竹義隆に預けられる。寛永十六年（一六三九）に切腹する。



（一九）**周防守重定**（五郎作・貞衛門）（一五五五～一六一五）六十歳没。重光の次男。永禄七年（一五六四）、美濃国稲葉山城奪取に従う十六人の一人。豊臣秀吉に仕え、文禄三年（一五九四）とき伏見城普請奉行の六人の一人。関ケ原の戦い以後は徳川家に仕え、摂津国吹田を領する上級旗本とし

て続く。京都知恩院に葬られる。

（二十）**お長**（一五七八～一五九五）十八歳没。竹中重定の娘。関白豊臣秀次の寵愛をうけ側室となり、四男土丸を生む。文禄四年（一五九五）秀次事件のとき秀吉の命により、側室等三九人悉く京都三条河原で斬首される。京都の瑞泉寺に供養塔がある。

三　文献の出自

（一）**文献③「竹中系図」岩手明泉寺文書**

この系図は、竹中重門の自筆である。それを家臣の竹中時次が貰い受け、その嫡子の時氏が相続し、この系図の末に、「時正徳二壬辰歳仲冬十一日　重栄」と揮毫していることより、「秘蔵のものであるが、故あって私竹中重栄（しげよし）が貰い受けた。正徳二壬辰は西暦一七一二年」のことである。竹中重栄は天和二年（一六八二）に伊予国大洲より養子に入り、竹中家の家督を相続する。（文献⑦から）

（二）**文献④「過現二世牒」岩手明泉寺文書**

岩手明泉寺第十世住職の竹中元甫が、竹中家を初めとする諸家の系図、城館、自寺の古文書などについてまとめた書物である。記述は、竹中重栄が整理した竹中家の古文書などに基づいている。

四　略系図からの考察

（一）文献③は竹中重門自筆のもので、竹中六郎左衛門（重氏）の兄である三郎左衛門の子孫・重元の兄弟・半兵衛の兄弟・重門自身の子まで添え字付きですべて記載されている故、信憑性は高いと考える。

（二）竹中重栄は、天和二年（一六八二）に伊予国大洲（愛媛県大洲市）加藤家（六万石）より竹中家初代重元から数えて六代重長の養子に入り、七代の当主となる。なお、重栄は重長の弟重貞が伊予国大洲加藤家に養子に入った子であるから重長の甥にあたる。寛永六年（一七〇九）には岩手八幡神社に石灯籠を奉寄進し、竹中家の氏神を大事にしている。

もしも、重栄が竹中家に養子にこなければ、重門自筆の系図は時氏家に埋もれていたかもしれない。竹中家七代目重栄の存在は竹中家にとっても大きな存在であったと考える。

（三）文献③、④に半兵衛の兄の重行（久左衛門）の記述がないのはどうしてかと疑問に思う。重行の没年は一五七〇年で、重門の生年一五七三年だから知らなかったと考える。

（四）文献④は竹中家にあった文献③を参考にし、当時残っていた他の古文書を見て、家柄・法名・没年月日まで詳しく岩手明泉寺第十世住職の竹中元甫が千七百年代初期以降に書いたと思われる。人物の法名や和号を考慮して書く苦労は察するに余りあるが、内容を吟味して史実と照合しなければならないと考える。

（五）重利と重定「主な人物（十三・十六）」

二人の続柄について、文献①の九一三ページには、「源介は、永禄五年竹中出羽守重光の子として」、一方、「重定は出羽守重光の次男にして」とある。源介とは重利である。気になるのは、源介は重光の子、重定は重光の次男という記述である。生年を見ると、重利は生年、永禄五年（一六六二）、重定は逆算して、生年、一五五五年となる。七つ違いの兄弟となる。どうして垂井町史は、兄弟関係をはっきりと明記できないか疑問に思う。

（六）重利・重定「主な人物（十三・十六）」

文禄四年（一九五四）豊臣秀次の側室が処刑されたとき、息女の父親は連座制によって自害した人もいる。竹中貞右衛門重定はなぜ自害しなくてもよかったのかを推察する。

重利は、偉大な半兵衛重治の後を継いで懸命に秀吉に仕え、側近となり、豊後国高田で一万三千石を得る。秀次に聚楽第を引き渡す時、秀吉から奥に仕える侍女を推すように求められ、兄弟の竹中重定の娘、お長の美貌と状況判断の確かさに感心し、推した。重利は、お長の方が秀吉・秀次に懸命に仕えただけなのに、無残に殺されたことが納得できない。

秀吉は重利の忠誠心を認め、徳川家康からの助命があったためか、重定を謹慎に留めた。これで、領地の安堵と竹中重定家の存続に繋がったと考える。その後、重定は関ヶ原の戦いのとき、福島正則に願い出てまで家康の陣に属している。戦後は駿河に居宅を与えられ、尾張の徳川家に付属している。

（七）重義と重信「主な人物（十四・十五）」

父重利の跡を継いで豊後国府内藩二代藩主となった。重義は密貿易の不正を訴えられ、寛永十一年（一六三四）二月、嫡子・源三郎と共に江戸浅草の海禅寺で切腹したことにより、府内藩竹中家はわずか二代三三年間で断絶することになる。さらに、兄重義も連座し、寛永十六年（一六三九）に切腹するという悲劇が続いて起きたことは誠に残念でならない。

（八）重常と重次「主な人物（十二）」

重門には、重常・重次の二児があり、重常には重高・重之の二児、弟の重次には重良・重房・重時の三児がある。重常系の二児はいずれも徳川家に仕えて、兄は五千石。弟は千石の旗本として幕末を迎える。重次系の三児は黒田家福岡藩士となる。（文献⑧）

五　過現二世牒と垂井町史通史の検証

（一）**与右衛門の検証**。「主な人物（七）」

文献④には「寛文元丑年」と読める。これは西暦一六六一年で年号の錯誤と思われる。ここでは生没年不詳とする。

（二）**於茶阿の検証**「主な人物（八）」

文献④には「オチャ　秀次公ニ宮仕シテ土丸君ト云一子生ス

母子共生害ニテ京瑞泉寺ニ葬ル」とある。豊臣秀次謀叛事件に伴い於茶阿の処刑は文禄四年（一五九五）の出来事を指している。父親の与右衛門は重治の弟から考えると年齢的にも疑問を感ずる。

そこで、江戸時代初期の代表的な次の二冊を調べて、名前と父親を書く。

（i）「太閤記」小瀬甫庵著一六二六年（現代訳吉田豊著　昭和五四年発行）、　お長御方　濃州竹中貞右衛門尉息女。

（ii）太閤記史料集から「太閤さま軍記のうち、一六一〇年太田牛一著」（昭和四〇発行本）、おちやう　美濃の国竹中与右衛門尉息女。

二冊とも没年齢は十八歳である。父親について、（i）は竹中貞右衛門、（ii）は竹中与右衛門とある。文献④の揮毫者は（ii）等で毛筆したと思われる。

次に、秀次の継室・側室達を調べてみると、秀次が聚楽第に入るとき、清洲城から多くの側室を連れて来ている。与右衛門の娘於茶阿が聚楽第に入るは父親がすでに病死している可能性もあり、誰かの推挙ないと大変困難と思われる。ここで、（i）と、前述の連座制の件と、文献①の竹中重定項には「一女あってお長と称し、文禄四年八月に秀次の妻悉く殺された」とある。これらの観点から、父親は竹中貞右衛門重定であり、子女はお長と考えるに至る。また、没年から考えて、生年は一五七八年とする

（三）彦八郎の検証。「主な人物（九）」

文献④には「織田信忠公仕へ十八歳ニテ明智日向守カ逆心之節　信忠公御供ニテ京都二条妙覚寺ニテ主従共ニ討死」とある。天正十年のとき、彦八郎が十八歳とすると生年は一五六四を示す。父親である重元は一五六二年に死去しているから、十八歳は明らかに誤りであり、故に、生年は不詳とする。

（四）女子（伊豆守妻）の検証「主な人物（十）」

ここには、「竹中伊豆守室　寿像　明泉寺ニアリ　文禄四乙未九月二九日没」とある。寿像とは生前につくられた肖像を言い、実際にこの像は当寺に保管されている。注目したのは没年である。文禄四乙未は一五九五年である。夫の重利は一六一五年まで生きているから妻の死後二十年も生きていることになる。随分年上の妻と思う。しかも、半兵衛や久作の妹と考えて生年は一五五〇年前後と考えると、夫の生年が一五六二年だから十歳前後の年の差がある。これには違和感を覚え、検証の余地がある。

六　終わりに

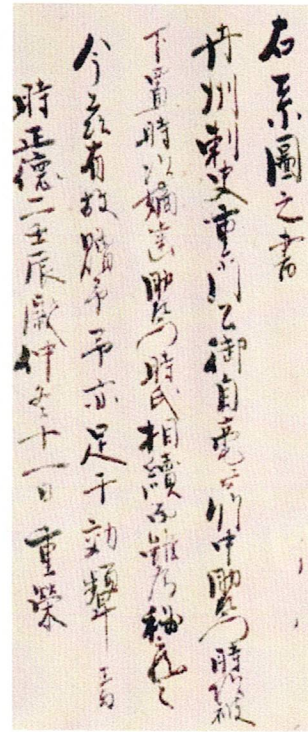
竹中氏の系図を種々な場面で見たが、半兵衛の兄弟・姉妹を網羅されている系図を見たことがなかった。昨年、三木市にある半兵衛のお墓参りと伊予国大洲城を訪れたことにより、竹中家を一層身近に感じ、今回の作成に至る。重門自筆の系図から、竹中氏の略系図を作成できたことは感慨深く感じる。

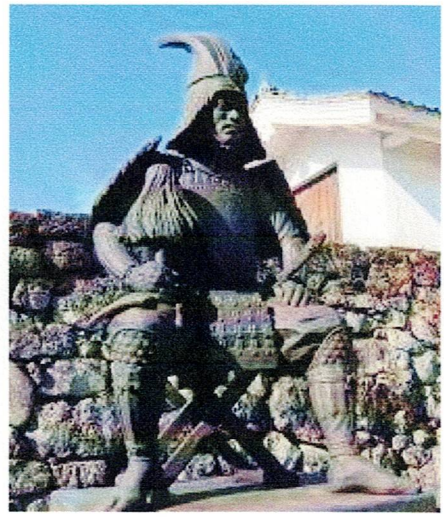
この原稿について、史実と違う文言があればご指摘を下されば幸いである。今後、生没年不詳の分かる古文書を見ることができれば僥倖の至りである。

七　参考文献

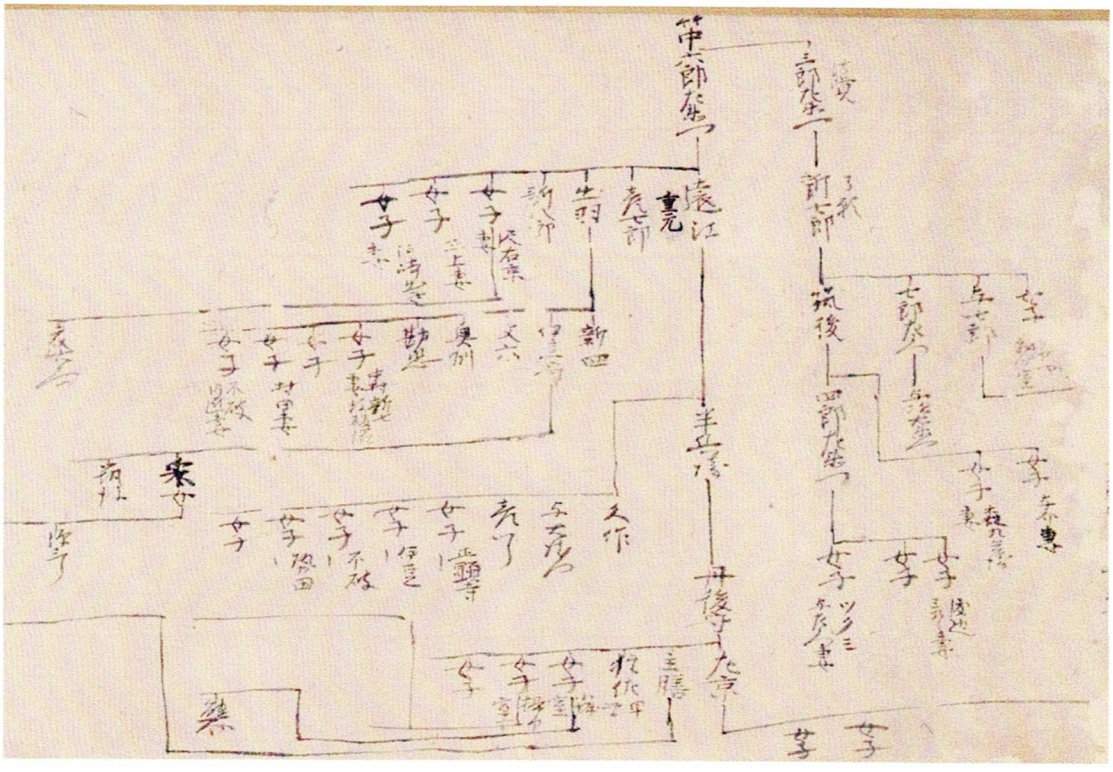
① 「新修垂井町史通史編」平成八年発行
② 「寛政重修諸家譜」江戸幕府が寛政年間に編纂
③ 「竹中系図（竹中重門自筆）」岩手明泉寺文書
④ 「過現二世牒」岩手明泉寺文書
⑤ 美濃諸家系譜の写し
⑥ 「竹中半兵衛重治公ガイドブック」竹中半兵衛重治公顕彰会
⑦ 「竹中半兵衛と重門」岐阜関ケ原古戦場記念館
⑧ 「竹中半兵衛のすべて」池内昭一編新人物往来社
⑨ フリー百科事典『ウィキペディア』

⑩ 「竹中系図（竹中重門自筆）」の奥書（重栄の自筆）





右の写真は竹中陣屋前の竹中重治公の銅像
次項の写真は文献⑦からの写しで、一枚目は文献③、二枚目は文献④である。



宋女正 重義
世公 重義公女法號釋妙春尼
之緑翠十六九月二十九日
仰高像安置御堂田明是寺
住之
重義公御牌名
春岩院殿松宗秋大居士
寛永十甲戌年二月二十三日
筑後守 重信 三十石世元知行所流刑
心源宗次居士 寛永十六己卯天
七月二十七日
女子 村田氏室
女子 不破内匠室
高春院殿樂岩宗榮禪定門
寛永十甲戌年二月二十三日 父ト同日ニ
切腹断絶
源三郎
女子 大坂天王寺 秋野坂室
丹後守 重門
世公 寛永伊勢守 範後
八女
得月院殿梅岩是香大姉
慶安元戊子歳四月十日
重門公御牌名 平九郎 御廟
光徳院殿雲井別剃史山蹊
出堂大居士 寛永八年四十歳 九日
女子 秀次公ニ寵仕シテ
十九若ト云ハ一ナルヘシ
世ヲ忍ビ生害ニテ
京瑞泉寺ニ葬ル
半兵衛 重治
示歳 播州岩之庄所ニテ病死
禪幢寺殿深龍永徹大居士
天正七甲申年六月十三日
久作 重隆
三十七歳不破郡表作村ニテ討死
覚雲利延大居士
天正十一年六月六日
與右衛門
豊臣秀次公ニ傅ク濃州大垣ニテ病死
梅林宗保居士 寛文元辛丑年四月十四日
長師
織田信忠公住七歳ニテ明智日向守カ
逆心之節 信忠公御供ニテ京都
ニ来リ覚寺ニテ主従共ニ討死
廊藤了然信士 天平年十七歳
六月二日
女子
安部木戸村正願寺室
女子
前大納言助次郎妻
女子
行中伊豆守室
法號釋妙正信尼 岩倉像樹寺ニ
之位牌アリ 天文九月六日
明泉寺ニアリ
女子
不破河内守 元治
後離別 西福殿ト云
女子
野田佐渡部室